

横光利一「日輪」論

—— 悲劇とバトス ——

田 口 律 男

はじめに

「日輪」(『新小説』、大正12・5)は、横光の初期作品のなかでは、比較的よくまとまった完成度の高い作品といふことができる。

しかし、作品そのものについての評価は、まだ確定されたわけではなく、いくぶんの揺れを見せている。たとえば、久保田万太郎のいろいろな動きが、書生芝居です(注)。Vという同時代評、片岡良一のAこの作には、(中略)生の不安などどこにも影さしてゐない。(中略)それがないため、たゞのべたらに美しいだけの絵巻物になつてしまつてゐる。Vという評価などは、作品「日輪」に、人間存在のあり方についての深い洞察、追求が欠如していると判断したもので、この系譜に属するものには、佐伯彰一氏の次のような厳しい否定的見解もある。Aいったい「日輪」はこれまでその新奇さのゆえに安易に過大評価されてきたように思われる。(中略)古代的な恋と征服の物語としては、素朴で実質的な迫力を欠いており、作中人物の心理も行動も余りに近代的に透けて見えすぎる。(中略)いさゝか恋のために、といった、いわば少女歌劇的な甘さを嗅ぎとらずにいられない。V

こうした否定的評価に対し、一方では、作家論的立場からの小林秀雄の次のような有力な評言も存在する。小林は、この作品にはA自意識の勝つた優れた作家VのA己れの独自の象の発見の退引きならぬ定著V(傍点、原文。)があると規定し、A眼V A擬眼Vの発見が、A己れの最も動揺する心VをA形Vの中に封じ込めたと言する。こうした見地は、A美貌といふ外面的な偶然にあやつられ、われ人ともに破滅するドラマを、一個の絵模様と化す作者のはりつめた美的作業Vという平野謙の見解や、A形Vを借りて、A人間の悲しみVという内面的現実を定着させようとしたA虚構家横光という自己表示の契機Vという栗坪良樹氏の把握(注)の仕方などにも受け継がれており、作家横光の内面にまで踏み込んで、この一見派手できらびやかな作品世界の内側を透視したものと云うことができる。

このように俯瞰してみると、作品「日輪」の評価は、作品論、作家論の立場の違いを見せつつ、いまだに揺れ続けているというのが現状のようである。本稿の目的は、改めて、作品世界の内部に分け入り、この作品の本質を明らかにするところにある。果たして、作品「日輪」は、Aたゞのべたらに美しいだけの絵巻物V(片岡良一)

として片づけられてしまつてよいものだろうか。私には、基本的な疑いがある。

ところで、この作品が発表された大正十二年は、文学史的に見れば、一つの八戯曲時代Vと呼ばれる時期にさしかかっている。横光自身も、この時期にはよく戯曲を書いており、この「日輪」も、歴史小説の装いをとりながら、その実は、歴史的意匠を借りた全くのフィクションであることや、その中心になっているのが、卑弥呼の悲劇であること、更には、八昭和三年一〇月、改造社から出した『新選横光利一集』では、これを八戯曲Vの部に収めていたりもする。V（保昌正夫氏）こと等を考え合わせると、この作品も、一つの戯曲的性格を持つものとして規定することができる。確かに、「日輪」は、リアリズムの眼で読むと矛盾する部分を含みつつが、しかし、この作品は、本質的にはディフォルメされた一つの劇として読まれねばならず、そのような作品の劇的構造についても言及してみようと思う。

一 卑弥呼が描いた悲劇の軌跡とその性質

まず、主人公・卑弥呼の描いた悲劇の軌跡と、その性質について概観しておこう。

卑弥呼の悲劇の端緒は、実は、実際の悲劇が起こる以前の八良人となるべき卑弥呼の大兄Vとの睦まじい愛の語りい場面（一―三）において、すでにほのみえているようである。

ここに描きだされた卑弥呼は、不弥の国の王女という特別の地位に立つ美しい女性という点を除けば、他から截然と区別されるような超越性、カリスマ性を持ちあわせているわけではない。むしろ、

恋人の弄する八皮肉Vにふりまわされてしまう弱さと、それにあらがおうとする少しばかりの勝気さとをひめた、どちらかと言え、恋にふりまわされている女性としてあるようなのである。

卑弥呼の美しさは、第二章で、次のように形容されている。まず、恋人の卑弥呼の大兄の口から、八爾は彼方の月のやうに美しい。Vと語られ、次いで、地の文で、八月の光りに咲き出た夜の花のやうな卑弥呼V（傍点、引用者。以下同断。）と確認されている。ここで、この二箇所共通して用いられている八月Vのイメージに注意するならば、八月Vには、満ち欠けがあり、恒久不変の太陽（八月輪V）とは対極の、移ろい易いイメージを持つ。また、太陽（八月輪V）の輝く明るさとは異なり、どこかに妖しさをひめた神秘美をイメージさせる。この八月Vのイメージを卑弥呼にだぶらせてみると、冒頭部分で描きだされた卑弥呼は、さらに明確になってこよう。つまり冒頭部分の卑弥呼は、一般にイメージされるカリスマ的、絶対的存在ではなく、どこかに弱さをひめ、移ろい易い心を持ち、恋にふりまわされ、しかも一方で、妖しい神秘的な美を所有する態の存在ということになってくるのである。

とすれば、ここで、卑弥呼についての二面性に気づかなければならないことになる。つまり、卑弥呼には、後にも見ることでできるような八月輪V要素のと、八月Vの要素とが、あやふやな形で包含されていることになるのである。この指摘は、すでに神谷忠孝氏の（注8）論考にもあるが、このことは、単に八卑弥呼の魅力V（神谷氏）としてだけでは説明できないように思われる。先回りして述べておけば、ここに、卑弥呼の悲劇の遠因が隠されているように考えられるのである。この点については、後にまた触れるとして、次に、左の

ような引用箇所に留意しておこう。

不弥の宮には、王女卑弥呼の婚姻の夜が来た。卑弥呼は寝殿の居室で、三人の侍女を使ひながら式場に出る可き装ひを整へてゐた。(中略) 侍女の一人は白色の絹布を卑弥呼の肩に着せかけて云つた。「空の下で、最も美しい者は私の姫」/ 侍女の一人は卑弥呼の胸へ瓊珩の勾玉を垂れ下げて云つた。/ 「地の、上の日輪は、私の姫」。

(八)

ここでは、侍女を通して、卑弥呼の美しさの一面が強調されており、それは、 \wedge 最も美しき者 \vee \wedge 日輪 \vee と形容されている。ここに、美しい王女としての輝しい存在である卑弥呼の \wedge 日輪 \vee の要素が語られるわけだが、しかし、ここで重要なのは、その上に冠されている限定的な言い回しの方であろう。つまり、ここでは、 \wedge 空の下で \vee \wedge 地の上で \vee というふうな現実世界の範囲内に限定されていて、卑弥呼の美しさが、超越的、絶対的な性質のものではないことがわかるようになってゐる。それは、あくまでも \wedge 空の下 \vee \wedge 地の上 \vee という限定つきの \wedge 最も美しき者 \vee であつて、あらゆるものを超越する絶対美ではないということが、ここに語られてゐるのである。だから、作品後半で、卑弥呼が、 \wedge 「あゝ、大神は吾の手に触れた。吾は、 \wedge 空に昇るであらう。地上の王よ。我れを見よ。我は爾らの上に日輪の如く輝くであらう。」 \vee (十七)と叫ぶ時、卑弥呼は、明らかに、その本来の性分から離反しようとしてゐると言える。作品冒頭での卑弥呼は、 \wedge 空の下 \vee \wedge 地の上 \vee という限られた境界における美しい王女であつて、しかも恋する女性と一般で、弱さをひめた移ろい易い心情を内包してゐるのであつた。そうした人間卑弥呼が、 \wedge 大空に昇 \vee り、 \wedge 地上の王 \vee の \wedge 上 \vee に \wedge 日輪の如く輝く \vee

という野望を抱いた時、卑弥呼は、自らの性を突破して、仮構の役割を選ばねばならぬことになつたのである。この点に、卑弥呼の最大の悲劇が見いだせると思われるのだが、それについても、後段で詳述するとして、卑弥呼の描いた悲劇の軌跡を、もう少し追いつけておくことにする。

実際の悲劇は、卑弥呼の婚礼の夜に起きる。かつて、道に迷い、生死の境をさまよつていたところを卑弥呼に救われた奴国王子の長羅は、卑弥呼に一目惚れしてしまい、卑弥呼を奪ひとるうとして、不弥の国に攻め入り、卑弥呼の新郎・卑狗の大兄をはじめ、父母その他多勢の人間を殺害する。この大量殺戮を契機として、以後、卑弥呼をめぐつての多くの殺戮劇が展開され、卑弥呼は、その渦中であつて、権力者である男達の手によつて次々に強奪され、極限にまで追い込まれていく。そして、そのそもそのきつかけとなつた仇敵・長羅に対して \wedge 復讐 \vee の念をかきたて、みずからの美しさを利用して、弱者たる位置から一転して強者に変貌しようとする。卑弥呼は、仮構の役割を演じ、自分にむらがりよる男達を掌中におさめ、最終的に、その本懐を達成するのだが、最後には、 \wedge 我を赦せ \vee という悔恨が残るだけで、卑弥呼は、絶対者としての位置と権力を手に入れつつも、ついには、その絶対者 \wedge 日輪 \vee としての仮面の内と外とで、完全に分裂してしまい、深い悲しみに沈んでしまふのである。

こうした卑弥呼の悲劇は、実は、この作品の冒頭から一分のくらくらもなく、運命的な非情さの中で展開してゐる。その点で、作品は、首尾一貫しているといふべきである。

ところで、ここで問題となつてくのは、次のような諸点である

う。まず、恋する女性であった人間、卑弥呼が、不条理な運命の作用で悲劇の極に追い込まれた時、いかにしてそこからの脱出・超克を企てていったか、ということである。この問題は、単に、卑弥呼がいかに状況に対峙したかという点にとどまらず、自らの本性であった八月Vの要素をいかに超脱し、八月輪Vへと変貌しようとしたかという観点からも読まれねばならず、その模索の形を明らかにしなければ、作品「日輪」の内実は、つかみえないことになるだろう。

また、次の問題は、卑弥呼が八月輪Vの仮面を自ら選びとり、絶対者の擬装にいちおう成功したにもかかわらず、究極のところで、 \wedge 我を救せVという形で、何者かの許しを乞い、悔恨にまみれてしまうことの意味である。この点については、これまでもいくつかの言及があった。まず、同時代評において、久保田万太郎が、 \wedge ……終ひの「大兄よ、大兄よ、我を救せ」といふかんどころは分らない。Vと疑義を提出し、それに同調して、菊池寛も、 \wedge さうだ。終ひの氣持がわからない。Vと述べている。これは、単なる疑義の呈示にすぎなかったが、こうした動きは、少数にはとどまらず、たとえば、片岡良一、佐藤昭夫氏、江後寛士氏と受け継がれ、少しずつ、その謎が解明されてきたのだった。それらの見解については、後段であわせて触れるつもりだが、それらにしても、まだうまく \wedge 我を救せVという台辞をめぐる卑弥呼の真実には迫りえていないように私には思われるのである。

以下、卑弥呼の陥った悲劇の性質という点からませながら、それらの問題について述べてみることにしたい。

二 \wedge 空V志向について

まず、第一点の、人間卑弥呼が、いかにして悲劇の極からの超脱を試みたか、という問題について見ることにする。それは、次のような段階を追って果たされようとしていた。

婚姻の夜に、奴国の長羅によってわが身を奪われた卑弥呼は、次には、奴国の宿弥（長羅によって殺される。）の息子である訶和郎によって略奪される。卑弥呼は、共通の敵である長羅への \wedge 復讐Vを誓わせたうえで、訶和郎と結婚する。そして、その逃亡中の二人が耶馬台国の兵士たちに捕われた時に、初めて、卑弥呼は、微妙な変化を見せる。

「爾は不弥の國の旅人か。」／「然り、我らは不弥へ歸る旅の者。我らを救せ。」と卑弥呼は云つた。（中略）／「行け。」／兵士たちは王の言葉を口々に云ひ伝へて動揺めき立つた。（中略）その時、突然、卑弥呼の頭に浮んだものは、彼女自身の類ひ稀なる美しき姿であつた。彼女は耶馬台の君長を味方にして、直ちに奴國へ攻め入る計画を胸に描いた。／「待て王よ。」と卑弥呼は云ふと、並んだ蕾のやうな齒を見せて、耶馬台の君長に微笑を投げた。「爾はわれらを爾の宮に伴なふか。われらは爾の宮を通るであらう。」（十四）

ここで初めて、卑弥呼は、自らの \wedge 類ひ稀なる美しき姿Vを自認し、それを逆手にとつて、 \wedge 復讐Vを具体的なものとして計画したと言つてよい。 \wedge 蕾のやうな齒を見せてV、 \wedge 微笑を投げVかけるのは、卑弥呼が仮構の役割を演じ始めたことを示している。しかし、この計画の結果、第二の夫訶和郎は、死に追い込まれる。その時の卑弥呼の述懐は次の通りである。

「ああ、訶和郎よ、もし我が爾に従つて不弥へ廻れば、我は

今爾とともにゐるのであらう。ああ、訶和郎よ、我を救せ。我は卑狗を愛してゐる。爾は我のために傷ついた。」 (十五)

ここで、卑弥呼は、自らの変貌がもたらした訶和郎の死に對して、 \wedge 我を救せ \vee という形で悔恨している。つまり、卑弥呼の変貌は、周囲の犠牲をひきおこさずにはおかないものであり、その悔恨を乗り越えたところにしか \wedge 復讐 \vee の成立はありえないのである。

この悔恨は、卑弥呼の内の \wedge 月 \vee の要素と通じ合っていて、卑弥呼が何か意志的な行動をとる時、必ず付随し、つきまといってくる。また、 \wedge 卑狗を愛してゐる \vee とあるように、卑弥呼には、殺された初めの夫への恋慕が断ちがたく残っており、これも、卑弥呼の \wedge 月 \vee の要素としての根強い本質だと言える。卑弥呼が、 \wedge 復讐 \vee を意図し続ける限り、こうした自らの \wedge 月 \vee の要素は超克されねばならず、そこに卑弥呼の内的な葛藤が存在するのである。そして、そことは、 \wedge 卑狗を愛してゐる \vee という卑弥呼の真実を棄てることにもつながるのである。

数日の間に第一の良人を刺され、第二の良人を撃たれた彼女の悲しみは、最早や彼女の涙を誘はなかつた。彼女は乾草の上へ倒れては起き上り、起きては眼の前の訶和郎の死体を眺めてみた。(中略)さうして、再び彼女は倒れると、胸に剣を刺された卑狗の姿が、乾草の匂ひの中から浮んで来た。彼女はただ茫然として輝く空にだん／＼と溶け込む霧の世界を見詰めてゐた。すると、今迄彼女の胸に溢れてゐた悲しみは、突然憤怒となつて爆発した。それは地上の特権であつた暴虐な男性の腕力に刃向ふ彼女の反逆であり怨恨であつた。彼女の眼は次第に激しく波動する両肩の起伏につれて、益々冷たく空の一点に食ひ

入つた。ふとその時、草叢の葉波が描いた地平の上から立昇つてゐる一條の煙が彼女の眼の一角に映り始めた。それは薄れゆく霧を突き破つて真直ぐに立ち昇り、渦巻きながら円を開いて拡げた翼のやうにだん／＼と空を領してゐる煙であつた。彼女は立ち上つた。さうして、格子を掴むと高らかに煙に向つて呼びかけた。／＼あゝ、大神は吾の手に触れた。吾は、大空に昇るであらう。地上の王よ。我れを見よ。我は爾らの上に日輪の如く輝くであらう。／＼石筍の格子の隙から現れた卑弥呼の微笑の中には、最早や、卑狗も訶和郎も消えてゐた。さうして、彼等に代つてその微笑の中に潜んだものは、たゞ怨恨を含めた慘忍な征服慾の光りであつた。

(十七)

長い引用になつてしまつたが、この場合において、卑弥呼は、一つのはっきりとした転機を迎えたと言つてよいだらう。ここにおいて \wedge 悲しみ \vee は、 \wedge 憤怒 \vee へ、そして \wedge 征服欲 \vee へと変質し、彼女の \wedge 月 \vee の要素は、 \wedge 日輪 \vee の要素へと転化してゆく。卑弥呼は、 \wedge 空 \vee へ \wedge 立昇つてゐる一條の煙 \vee に啓示を受け、自らも \wedge 大空に昇る \vee ことを欲し、 \wedge 地上の王 \vee の \wedge 上 \vee に \wedge 日輪の如く輝く \vee ことを決意する。これは、 \wedge 空の下 \vee \wedge 地上の上 \vee の住人であつた卑弥呼が、絶対者・超越者たらんことを欲した初めての場面でもあつた。

ここで、引用文中にある \wedge 大空に昇る \vee という卑弥呼の台辭に注目しておきたい。この \wedge 大空へ昇る \vee という欲求は、 \wedge 空の下 \vee \wedge 地上の上 \vee の住人である卑弥呼が、 \wedge 悲しみ \vee を超克すべく思つた \wedge 空 \vee 志向とすることができる。現世的な、しかし圧倒的な \wedge 悲しみ \vee を、 \wedge 大空 \vee という全く異質な媒体を通して相対化し、

乗り越えてゆこうとする意志的な心の動きと見てとることができ
る。こうした△空▽志向は、実は、横光文学（特にその初期）の一
つの重要な志向性として確認しておかなければならないことなので
ある。

未定稿「悲しみの代価」の次のような用例にも注意しておこう。

彼はつねにも増して妻の存在が不愉快になつて来た。彼は空を
見た。これは彼の癖である。彼はいつか宇宙が十三万であると書
かれた書物を見て以来、空を見るとその見たときに限つて、十
三万の宇宙と人間とを比較しながら想像して自分を極度に輕蔑
する氣になつた。／＼今も彼は空を見てゐると自分の肉体も妻も
繪での者を輕蔑し去つた自分の心だけが清く天上へ、払つてゆく
やうな氣持がした。さうして彼のこの癖は彼が妻から苦痛を受
けたときに限つていつのまにか自然と用ひられる療法の一つに
なつて来てゐた。

ここでは、彼なる人物は、妻から受けた△苦痛▽を浄化するため
に、宏大な△空▽△宇宙▽へと想いををせ、とるに足らない小っぼ
けな存在である自己を△輕蔑▽し去り、その△苦痛▽をも同時に浄
化しようとして試みている。これは、△空▽志向の淵源の一つとして注
目されるが、作品△日輪▽の卑弥呼の場合と比較すれば、まだ対症
△療法▽の領域にとどまるものにすぎない。卑弥呼の場合は、これ
はもう雄々しい意志の力と言ふべきで、△地の上▽の△悲しみ▽の
一切を超克しようとする意志の烈しさを感ずることが出来る。

このように、横光文学にとつての△空▽とは、△悲しみ▽△苦痛▽
といった精神的苦痛を昇華し、超克する一つの発想転換の機軸とな
るものであった。こうした△空▽志向は、横光文学の初期におい

て、ひときわ顯著で、「日輪」と同時発表された「蠅」（『文芸春
秋』、大12・5）も、そうした見地から読まれるべき作品と言ふこ
とができる。

一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車体に引かれて突き立
つた。瞬間、蠅は飛び上つた。と、車体と一緒に崖の下へ墜落
して行く放埒な馬の腹が眼についた。さうして、人馬の悲鳴が
高く一声発せられると、河原の上では、押し重なつた人と馬と
板片との塊りが、沈黙したまゝ動かなかつた。が、眼の大きな
蠅は、今や完全に休まつたその羽根に力を籠めて、たゞひと
り、悠々と青空の中を飛んでいった。

（蠅）

たびたび引用されるこの「蠅」の末尾部分も、死の△塊り▽とな
り終つた人間集団の運命的なカラストロップを、△たゞひとり、
悠々と青空の中を飛んでいった▽△蠅▽の存在によつて、一瞬にし
て差異化してしまつている。ここでの△空▽志向は、知的な操作の
方がおもてだつて、人間存在の不条理性を相対化する理念にまでは
押しあげられていないようだが、一連の志向として把握されねばな
らないところである。

こうした△空▽志向は、やがて、横光の文学に対する認識と方法
とに結実し、初期作品の特徴となつた、人間存在を高みから見おろ
す鳥瞰的な構図の作風となつて定着してゆくのだが、今はそれは措
くとして、もう一度、作品「日輪」の方へもどることにしよう。こ
こで、一つの問題が生じてくる。果たして、卑弥呼は、本当に△大
空に昇る▽ことができたのだろうか。

それについては、ついに否と答えねばならないようである。先に
引用したように、△大空に昇る▽り、△日輪の如く輝く▽という卑弥

呼の△惨忍な征服慾△は、かなり確実なものとして卑弥呼の内部にめばえてきていた。そしてその瞬間には、確かに、△卑狗も訶和郎も消えてゐた△。卑弥呼は、△征服△の実現のために、△妖艶な微笑△を顔にはりつけ、邪馬台国の反耶、反絵を掌中におさめようと演技し、おおかた、それにも成功していた。にもかかわらず、時として、卑弥呼の演技には、破れ目が見え、素顔である卑弥呼の△月△的要素が露呈してしまうのである。

△「あゝ、爾は我のために我の夫を撃ちとめた。我を我の好む邪馬台の宮にとゞめしめた者は爾である」△(十九)と不敵な台辞を吐く卑弥呼が、そのすぐ直後に、△「あゝ、訶和郎、爾は不弥へ帰れと我に云つた。我は邪馬台の宮にとゞまつた。さうしてあゝ爾は我のために殺された」△(十九)と言つて△泣き崩れ△、更には、△「あゝ、大兄よ。爾は爾の腕の中に我を雌雄子の如く抱きしめた。爾は吾を吾が爾を愛するごとく愛してゐた。あゝ大兄、爾は何処へ行つた。返れ」△(十九)と悲痛な叫びをあげねばならなかったのは、卑弥呼の内部の奥深いところで、いまだに、△月△的要素が断ち切られていなかったからである。卑弥呼は、△復讐△のために、△地上の王△の△上△に輝く、虚構の役割としての△日輪△を選びとり、自らをそれに擬そうとしていた。そして、演技を通して、その方向へ確実に歩みだしてゐたのだが、その内面においては、いまだ、みずからの本性である△月△的要素を温存させたまふだったのである。

こうした煮えきらない態度を、佐伯氏のように短絡させて、△少女歌劇的な甘さ△△通俗読物のヒロインの性格規定△と断罪することとは慎むとしても、卑弥呼は、自らの内にこうした△月△的要素を

温存させている限り、決して△日輪△にはなれず、やがては、その△日輪△の仮面の内と外とで分裂し、より深い△悲しみ△へと沈みこまねばならなくなるのである。ここに、卑弥呼の最も本質的な葛藤と悲劇があると見てよい。

三 △我を救せ△をめぐって

以後、作品世界は、卑弥呼の葛藤をひきずりながら、それをいつそう追いつめ、卑弥呼をひき裂く形で展開してゆく。

麤て、彼女は不弥と奴国と邪馬台の国の三國に君臨するであらう。さうして、もしその時が来たならば、彼女は更に三つの力を以て、久しく攻伐し合つた暴虐な諸国の王をその足下に蹂躪するときに來るであらう。彼女の澄み渡つた瞳の底から再び浮び始めた残酷な微笑は、静まつた夜の中をひとり毒汁のやうに流れてゐた。△「あゝ、地上の王よ、我を見よ。我は爾らの上に日輪の如く輝くであらう」△(中略)しかし、彼女はひとりになると、またも毎夜のやうに、幻の中で卑狗の大兄の匂を嗅いだ。(中略)△「卑弥呼、卑弥呼」△彼女は卑狗の囁きを聞き乍ら、卑狗の波打つ胸の力を感じると、崩れる花束のやうに彼の胸の中へ身を投げた。△「あゝ、大兄、大兄、爾は何処へ行つた」△/彼女の身体は毛皮の上に倒れてゐた。しかし、その時、またも彼女の怨恨は、涙の底から急に浮び上つた仇敵の長羅に向つて猛然と勃発した。最早や彼女は、その胸に沸騰する狂ほしい復讐の一念を圧伏してゐることが出来なくなつた。△「大兄を返せ、大兄を返せ」△/彼女は立ち上つた。

(二十二)

彼女は彼女自身の身の穢れを思ひ浮べると、彼女を取巻く卑狗

の大兄の靈魂が今は次第に彼女の身辺から遠のいて行くのを感じて来た。彼女の身体は恐怖と悔恨とのために顫へて来た。／＼「あゝ、大兄、我を救せ、我を救せ、我のために爾は返れ。」

(二十三)

こうした引用を眺めてみれば、いかに卑弥呼が、内面的に揺れ動き、分裂する心情を内包していたかが伝わってくる。その根幹には、依然として卑弥呼の大兄に対する断ちがたい恋慕の情が渦巻き、その想いが強ければ強いほど、卑弥呼を殺害した長羅に対して、おさえがたい大怨恨と大復讐の念とがこみあげてくる。そして、その大復讐を実現しようと演技し続けければ、卑弥呼は、自身の人身の穢れを意識せざるを得ず、卑弥呼の大兄の幻影は、卑弥呼から次第に遠ざかってゆく。こうした円環をなす苦惱は、卑弥呼が、かつて道迷っていた長羅を救ってやった時点で、全てが予定され、一分のくるいもなく進行してきたのであった。出口は、どこにもないと言つてよい。

ここで、長羅についても少し言及しておくならば、長羅が卑弥呼に一目惚れし、彼女を奪い取ろうと決意したのも、少なからず必然性のあることなのだ。奴国の王子長羅をして、卑弥呼の手下僕にならう(三)とまで言いださせたものは、もちろん卑弥呼の八月の光りに咲き出た夜の花Vのような妖しい美しさであったが、それとは別に、卑弥呼が、私怨や政治的判断を別にして(長羅の祖父は、不弥の王母を略奪し、また、その父は、不弥の靈床に火を放ったという過去がある)、純粹に人間的良心に基づいて長羅を救ってやったからに他ならなかった。更には、帰国した長羅の目に映った故郷奴国のありさまが、その大淫蕩Vな君長(長羅の父)に象徴

されるように、性的に墮落していたこと、奴国の女性が人子を産む猪のやうにV、人子を胎んだ冬の狐のやうに太つてゐるVて、卑弥呼の美しさから遠く隔たっていたということなども、長羅を卑弥呼の方へと駆りたてる大きな理由となった。(これに比して、佐藤昭夫氏が、大純粋行動への憧憬Vという点で、この作品の最大のモチーフであるとした反絵の方は、大性の衝動Vにつき動かされるだけの単純な人間像しか持たず、やや底が浅いという印象を否めない) それにしても、卑弥呼の陥った悲劇は、運命悲劇とも性格悲劇とも名づけ得る性質のもので、卑弥呼は、そこからの超脱を試みながらも、ついに、そこに搦めとられたまま、作品は、結末を迎えることになる。

卑弥呼の従えた耶馬台国の反絵と、奴国の長羅とは、卑弥呼の目前で、一騎打ちをおこなない、その結果、大反絵の剣は長羅の腹へ突き刺さVり、大同時に、長羅の剣は反絵の肩を斬り下げVる。反絵は、やがて息絶え、長羅も、瀕死の状態で、卑弥呼の名前を呼びつづける。

「卑弥呼、我は爾を奪はんために、我の国を滅ぼした。我は爾を奪はんために我の父を刺した。爾は返れ」／長羅の蒼ざめた額は地に垂れた。／「卑弥呼、卑弥呼」／彼は恰も砂に吐くごとく彼女を呼ぶと、彼の臉は閉ぢられた。卑弥呼の身体は顫へて来た。彼女の剣は地に落ちた。／「大兄よ、大兄よ、我を救せ。彼を刺せと爾は云ふな」／卑弥呼は頭をか、へると剣の上へ泣き崩れた。／「大兄よ大兄よ我を救せ。我は爾のために長羅を撃つた。我は爾のために復讐した。ああ、長羅よ長羅よ、我を救せ。爾は我のために殺された」／長羅と反絵と卑弥呼を

残して、彼方の森の中では、奴国の兵を追ひながら、奴国の方へ押し寄せて行く耶馬台の軍の鯨波の声が一段と空に上つた。

(二十七)

ここで作品世界は、終結を迎えるわけだが、この作品の結末について、従来、いくつかの疑義が提出されてきたことは、先に指摘したとおりである。つまり、それは、絶対者A日輪Vたらんことを志ざしていた卑弥呼が、ここで、その本懐を達成したにもかかわらず、なぜ、A我を赦せVという形で悔恨にまみれねばならなかったのかという問題である。

引用した文脈に沿って、卑弥呼の心理の流れを大きく跡づけておくならば、A大兄よ、大兄よ、我を赦せ。彼を刺せと爾は云ふな。Vの部分で、卑弥呼は、自ら決意したA復讐Vの最終的達成である、長羅をA刺Vすという行為を、ついに実行することができず、ためらいの果てに、大兄に向かつて、その行為を忌避することの許しを乞うている。そして、A我は爾のために長羅を撃つた。我は爾のために復讐した。Vとして、自身の行為を、A爾のためVという大義名分のもとに置いて、正当化しようとしている。最後の、A長羅よ長羅よ、我を赦せ。爾は我のために殺された。Vの部分に至っては、自身を悲劇に追い込んだ張本人である長羅までも、自らのA復讐V行為の犠牲者とみなし、自身の非を詫び、許しを乞う形になっている。つまり、ここでの卑弥呼の心理は、すべて、自身の選択したA復讐V行為に対する深い悔恨によって支配されていると見ることができるのである。こうした卑弥呼の心理の動きを、最もうまく解き明したものに、江後氏の次のような解釈がある。

征服は、彼女の身の穢れを前提としないかぎり果たせないもの

であり、大兄の愛を裏切る結果になる。(中略)したがって、最後のA大兄よ、大兄よ、我を赦せVの一句は、このような非人間的な征服に命をかけ、大兄の魂を捨てざるをえない矛盾に突進した自己の誤ちに対する謝罪のことばと言えよう。征服を達成したはずの卑弥呼が、大兄に許しを乞い、長羅に対しても最後のとどめを刺すことができないのは、非人間的な征服を放棄したからである。まさしく、卑弥呼は人間に還つたのだ。

卑狗の大兄への愛を裏切り、身を穢す非人間的な征服を選択したことへのA謝罪Vを、この最後の一句に読みとろうとする江後氏の解釈は、たぶん間違っていないだろう。先にも見たように、卑弥呼は、A彼女自身の身の穢れを思ひ浮べると、彼女を取巻く卑狗の大兄の靈魂が今は次第に彼女の身辺から遠のいて行くのを感じ、VとA「あゝ、大兄、我を赦せ、我を赦せ、我のために爾は返れ」Vと悔恨に身悶えていた。そうした箇所を照らしみてみると、江後氏の解釈の正当性は証明される。しかし、卑弥呼が、A非人間的な征服を放棄しV、A人間に還つたのだ。Vとする氏の結論の仕方はどうだろうか。

確かに、卑弥呼は、A征服Vを放棄したかもしれない。しかし、実際の卑弥呼は、もはや、A不弥と奴国と邪馬台国の三国に君臨するV位置へと確実に押しあげられていく運命に立たされているのである。作品結句の、A長羅と反絵と卑弥呼を残して、彼方の森の中では、奴国の兵を追ひながら、奴国の方へ押し寄せて行く耶馬台の軍の鯨波の声が一段と空に上つた。Vという描かれ方にも、すでに、卑弥呼一個人の思惑を超えたところで、しかも、卑弥呼を頂点に据えた集団が、確実に生動し始めたことが暗示されているのであ

る。とすれば、 \wedge 卑弥呼は人間に還つた \vee ということよりも、もはや選れないような場所にまで確実に踏み出してしまったことの方を確認しておかねばならないのではなからうか。

つまり、卑弥呼の立たされてゐる磁場をかみくだいて言いなおせば、次のようになる。卑弥呼は、 \wedge 地上の王 \vee を征服し、その \wedge 上 \vee に \wedge 日輪の如く輝く \vee という本懐を達成し、今や三國に君臨する位置に進みだした。にもかかわらず、卑弥呼は、そうした非人間的な行為を選択したことを、最後に至つて、深く後悔してゐるのである。何故、後悔しなければならなかつたのか。それは、江後氏の言うように、大兄への愛を裏切らざるをえない非人間的な方向へと進みだし、我が身を犠にしたからに他ならない。しかし、更につけ加えるならば、卑弥呼は、 \wedge 日輪 \vee たる自らの役割に耐えられなくなつてゐるということが言えるだろう。 \wedge 地の \wedge 上 \vee の一切の \wedge 悲しみ \vee を(換言すれば、自らの \wedge 月 \vee 的要素を)超絶して、自身を \wedge 日輪 \vee に擬せようと演技してゐた卑弥呼ではあつたが、最後に至つて、ついに、生地の人間の感情に押し流されてしまつたということにもなるのである。しかし、卑弥呼を圍繞する状況は、すでに、卑弥呼を \wedge 日輪 \vee たる位置へ確実に押しあげようとしてゐる。つまり、卑弥呼は、自らの選択した \wedge 日輪 \vee の仮面の内と外とで、完全に分裂してしまつたということになるのである。

\wedge 我を赦せ \vee という台辞は、これまで、 \wedge 分らない \vee 部分とされ、作品の論理的矛盾とまで指摘されてきたが、しかし、そうした読み方は、実は、卑弥呼の内実を二面的に捉えたものでしかないだろう。 \wedge 月の光りに咲き出た夜の花 \vee のような美しさと、私怨や政治的判断を別にして長羅を救つてやつた人間の良心とが結果して、

悲劇に追い込まれた卑弥呼が、その本性であつた \wedge 月 \vee 的要素を超越して、 \wedge 日輪 \vee に変貌しようとする精神のドラマは、そう単純なものであるはずがなく、作品の主眼は、その変貌の単純な成就を描くことにあつたのではなく、その過程において煩悶し、葛藤する卑弥呼のパトス(受動、受苦)的存在としての悲劇を描くことの方にあつたと見るべきなのである。

そして、その悲劇も、初めは、その美貌が偶然に誘ひ入れた運命悲劇の様相を呈していたが、 \wedge 日輪 \vee を志向しはじめてからは、自身の \wedge 月 \vee の性格を超越しようとして、どうしてもそこから脱けだせないという性格悲劇を体現するようになってきている。つまり、一口に悲劇と言っても、それは、重層的な構造を持つものとして創られてゐるのである。 \wedge 我を赦せ \vee という台辞は、そうした悲劇の体現者、パトスの存在としての卑弥呼の位相を最もよく象徴するものと言ふことができるだろう。

四 悲劇としての「日輪」

以上、卑弥呼の描いた悲劇の軌跡と、その性質という観点から、作品「日輪」を再読してみたわけだが、そこから明らかになつたことは、一、「日輪」に登場する卑弥呼は、一般にイメージされるカリスマ的、超越的存在ではなく、その本性は、恋する女性としての弱さと移ろい易さとを秘めた、 \wedge 月 \vee 的要素と \wedge 日輪 \vee 的要素とをあわせ持つ存在であること、二、長羅との偶然の出合いが結果して、夫や父母を失ひ、わが身も奪われてしまふという運命悲劇にまきこまれること、三、 \wedge 復讐 \vee を決意し、更には、 \wedge 日輪 \vee たらんことを志向するが、自らの \wedge 月 \vee の性格をついに超越できず、煩悶

と悔恨の渦にまきこまれるという性格悲劇に陥ること、四、その悲劇の様相が、パトス（受動、受苦）的存在としての卑弥呼の姿を明瞭に映しだして、それが、作品の主眼となり、首尾一貫していること、などであった。こうした観点から判断すれば、作品「日輪」は、すでに歴史小説の範疇からはほど遠く、むしろ、この作品を一つの劇（悲劇）として性格規定しなければ、その本質を見誤ってしまふことになつてくる。

そして、この作品を、劇（悲劇）と見なせば、単に、近景としての卑弥呼だけでなく、遠景に退いている個々の登場人物についても、同様にパトスの色彩が施されていることに気づくのである。たとえば、先に少し触れた長羅についても、卑弥呼のために、自らの△国を滅ぼし▽、△父を刺し▽、△宿弥を刺し▽、そして、最終的には卑弥呼までも失ひ、一切のものを手放さなくてはならないところへ追い込まれている。また、長羅をひそかに慕い続け、そして見向きもされずに死んでいった香取という女性なども、全く同様である。遠景の悲劇が、近景の悲劇と相乗しあつて全編を構成している点に、この作品の重層的な構造を認めることができる。

人間存在が、不条理なものによって支配され、そこからの超脱を希求しながらも、ついにはそこに摺めとられてしまうというドラマを、壮大に構築したのが、この作品「日輪」ということができ、そこに造形されたパトスの存在としての人間を生硬に描きだしたのが、その特異な文体ということになつてくる。

人間存在の不条理性、パトス性を、方法的に表出する術を見いだした点に、この作品の意義があり、そこに、習作期からのターニング・ポイントを認めることができる。以後の横光文学は、そうした

問題意識を持続的モチーフとし、更には、新たな時代的問題をも巻き込みつつ展開していったのである。(了)

注

- 1、「第四回創作合評——五月の創作——」（『新潮』、大12・6）
- 2、片岡良一「解説」（『岩波文庫』『日輪』、昭31・1）
- 3、佐伯彰一「川端康成集横光利一集解説」（『日本近代文学大系第42巻 川端康成・横光利一集』、昭47・7、角川書店）
- 4、小林秀雄「文芸時評——横光利一『機械』」（『文芸春秋』、昭5・11）
- 5、平野謙「解説」（『現代文豪名作全集20 横光利一集』、昭28）
- 6、栗坪良樹「虚構家横光利一の誕生——『日輪』論」（『評言と構想パンフレット』、昭45・5）
- 7、保昌正夫『横光利一』（昭41・5、明治書院）
- 8、注釈・神谷忠孝、『日本近代文学大系第42巻 川端康成・横光利一集』（昭47・7、角川書店）。頭注に、△卑弥呼には、日輪に象徴される華やかな美しさと、静かさを思わせる月のような美しさがあり、その二面性が卑弥呼の魅力となっているようである。▽とある。
- 9、注1に同じ。
- 10、注2に同じ。△残忍な征服慾からやがて地上に日輪の如く君臨するやうになつた女性を描かうとしたはずの物語が、さういふものになりきらず、末段ではかへつて美しいが故に常に悲劇をまき起さねばならぬ人間の悲しみを描かうとしたものであるかの印象さへ持たせるやうなものになつてしまつた。▽とある。

11、佐藤昭夫「『日輪』小論——横光利一論Ⅱ——」（『成城文芸』、昭37・4）。△彼女（注、卑弥呼）は、地上の王となった時、我以外の誰かによって赦されていなければならない我であったことを知ったのである。地上の偉大なる支配者としての巨大な不安を選ばずに、「我を赦せ」と超越者を呼び寄せることによつて、赦免と庇護による被支配者の安逸を選ぼうというのだろうか。▽とある。

12、江後寛士「『日輪』考——△我を赦せ▽の解釈をめぐって——」（『たまゆら』、昭45・3）。△読者は、元来弱者であった卑弥呼が、男たちの△暴虐▽を超える力を持ちはじめ、復讐を遂げ、征服しおこせるであろうと期待する。（中略）……終末部に至つて、△我を赦せ▽という一句がでてくることは、あまりにも唐突で、理解しがたいのである。／＼この結果を予想することはほとんど不可能である。▽とある。

13、この点については、拙稿「横光利一『街の底』論——新感覚派文学の内実と意味——」（『近代文学試論』、昭59・12）で詳述した。

14、注3に同じ。

15、注10に同じ。

16、注11に同じ。

（一九八五年一月一六稿了）

附記

本稿の横光利一の作品等の引用は、河出書房新社版『定本横光利一全集』に拠った。仮名遣いは原文のまま、漢字は現行の字体に改めている。